AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2018.7) 平成29年度:40.

生殖期年齢のがん患者の妊孕性温存の意思決定を支える看護

片山 恵理

生殖期年齢のがん患者の妊孕性温存の意思決定を支える看護

旭川医科大学病院
4階東ナースステーション　片山恵理

【目的】生殖期年齢でがんと診断された患者が、妊孕性の温存を意思決定した要因を明らかにし、意思決定支援に必要な看護を検討する。
【方法】がん診断後に妊孕性の温存について意思決定した女性患者3名とする。半構造化インタビューでデータ収集し、山浦(2012)の質的統合法(KJ法)を基に個別分析後に総合分析を行った。研究協力者へ、研究目的、方法、研究協力の自由意思と拒否権、研究協力の有無による不利益は生じないこと、途中辞退の保証、プライバシー・個人情報の保護、データの破棄方法について、書面を用いて説明し同意を得た。研究者所属施設倫理委員会の承認を得て実施した。
【結果】生殖期年齢でがんと診断された患者は、死や予後への恐怖、さらに将来の結婚や妊娠・出産への不安を抱えている。このような状況で思い悩みながらも＜がんになったがそれでも子供が欲しいと話せた＞ように、何でも話せる＜医療者との関係性＞を築き、その妊娠・出産への希望を理解してくれた医療者のサポートを受けて＜妊孕性温存の決意＞をしている。そして＜母になる希望をもてた＞と感じている。＜妊孕性温存に賛同し協力してくれた夫＞は、子供が欲しいと希望していた患者を＜丸ごと受け止めて支えてくれた＞存在であり、その存在も＜妊孕性温存の決意＞を支えていた。しかしその後、夫の支えと医療者のサポートを受けて納得して決意し行った妊孕性温存であっても、いつ妊娠できるかわからないという＜妊娠・出産の不確実性＞によって＜母になることの困難さを自覚＞していた。このような経過をたどる患者は、これらの体験に影響を受けて＜側にいて支え合える存在＞であった＜家族への感謝＞を抱いていた。
【考察】
がんになったことで結婚や妊娠、出産は困難と感じていた患者は、妊孕性の温存に母になる希望を抱いていた。その希望がこれからの治療や人生に立ち向かえる力になると考える。妊孕性温存の意思決定を支援する看護としては、がんの診断早期に妊孕性温存の情報提供が行われ、可能性を検討できるよう支援すること、そして、患者を理解し希望を支えるコミュニケーション能力、すなわちラポートを築く能力が重要であると言える。そのためには、基礎教育からライフステージに応じたがん患者の支援を学ぶとともに、意図的に意思決定支援について継続教育を行うことが必要と考える。